[ 研究・専門 ]

# 生業の生態系の保全 ーその建築思想と実践

## 『日本的な住まいとまちづくり～匠の技を活かすこれからの建築』

三井所　清典 ( 株式会社 アルセッド建築研究所 代表取締役所長)

※本稿は令和元年度第 1 回交流セミナー（2019 年 10 月 23 日開催）の講演内容を元に構成されています。

### 0. ご挨拶

『生業の生態系の保全』という本を出しました。これは工学院大学の公開講座の内容をもとに補いながら本にしたものです。
キーワードに生業の生態系がありますがこれを保全することがテーマです。私はこれまで地域に根付くとか地域に依拠するというような建築の作り方、まちづくりのしかたに努めてきています。それから協働と連携を重要なキーワードと考えています。そういう事にからむ話が全体に行き渡っていると思います。匠の技を活かすこれからの建築というのは、日本の建築技術あるいは文化の中に深く根付いている技術を大切にしたいという雰囲気が次第に湧き上がってきました。新しい技術と引き継いできた技術とを未来に引き継いでもらうように技術を融合させていくことが重要ではないかと思っています。

### 1. 中越地震（2004 年）における旧山古志村の復興住宅の提案

復興という時に感じたことをお話します。はじめに中越地震の被災地山古志の例です。中山間地でこんな棚田の美しい風景がすべて崩れて道も全滅しました。川が溢れて道が通れなくなってしまったので舟で渡るなどの調査をしました。

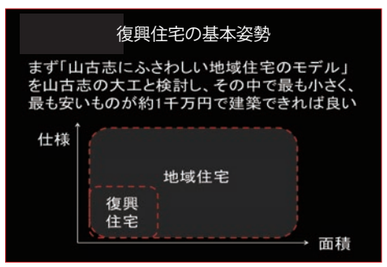
山古志の特徴：美しい棚田

震災半年後の状況
（2005.5　初めての調査団）

この時、山古志の長島村長と最後の舟に乗りましたが調査隊が渡り終えるまでのかなりの時間待つことになりその間に復興について色々な話をしたのです。復興についての私の方針はこういうことを考えてますがどう思われますかと話をしたのです。地震に遭ってもこんなにしっかり建っている集落もあります。こういうところは修理しながら元に戻します。壊れた家は新しくしなければいけないので概ね半分は新築という被害の状況でした。
山古志の建物は雪が降ると妻壁がはっきり見えるんです。

冬の虫亀集落（３mの豪雪地帯）

というのは妻壁のところは屋根雪が落ちてこないので雪が積もらない。そこから建物に出入りをするのがこの地域の特徴です。岩手の遠野の曲り家は雪が降らないのでＬ型の真ん中辺りの入り角から出入りしますが、ここは一番出っ張った妻壁のところからしか出入りができない。冬になるとこの地域の家が作られた根拠がはっきり分かるようになります。
私は復興住宅というのは小さくて仕様は程々であまり作り込まないような家がいいと思っています。これは長島さんと話をしたときの重要なポイントですけど、在来の建物が半分残り半分新築する。半分新築したものが在来のものと作り方が違っていると、将来メンテナンスをしていくことが大変なことになる。村の大工や工務店では手が出せないようなものになってはいけないのではないかということを一番に考えました。
重要なのは生活の復興でそのためには棚田の修理や棚池での錦鯉の養殖とか酪農とかそういう生活の基本である生業をやり始められることが重要で、住まいは小さく粗末でいいということを説明しました。
大きさや仕様に関しても将来仕上げて足していけるようなものにする。この復興ですべての家が満足する改修と新築ができてしまったら、５年 10 年注文が出ません。そうするとこの村で生きてきた工務店や大工は仕事ができなくて廃業せざるを得ない。30 年先に建物に手を入れたくなったときに職人が誰もいないと大変困ったことになる。だからまず小さく作って増築したりする注文を村に出しながら生きていけるようなことを考えましょう。お医者さんがいなくなった無医村の様に、工務店や職人がいなくなった村っていうのを考えてみてくださいと言ったらわかってくれました。
山古志村は地震の後に長岡市と合併し委員会ができ、基本プランとして６つのモデルを作りました。モデルを作っていく過程の話ですけど地元の工務店、大工さんたちと仮設住宅の集会所で会議をやりました。私は雪国で２つの HOPE 計画（地域住宅計画）に携わる経験がありましたので、その話を紹介しながら皆さんの家造りの話を聞き、その両方の話をまとめたようなもので住宅を作りましょうという趣旨のワークショップを開きました。
住宅の大きさについて未完成でいこうという話、在来軸組工法とすることは工務店の人たちと強い合意ができました。




お気づきかと思いますが妻側がよく見えるような造形で軒がとても高い。これは雪が積もるから軒が高くなっています。それから羽目板がずいぶん高いところまであります。これも雪との関係で壁が傷まないよう高くなっています。屋根雪を降ろさないでいいことにするために、富山県の山奥で実験して確認したことを提案したらそれでいこうという話になりました。３mの降雪と屋根雪が合わさって６mくらいの軒高が必要になってくることがわかりました。地域に根付く、地域に依拠する条件です。
富山県の山奥で雪がどうやったらすべるかという実験をしました。５寸勾配、４寸５分勾配、３寸５分、３寸とだんだん緩やかに実際にモデルを作って現地ですべり具合を見ましたら、４寸が滑らなくて、あとみんな滑ったという結果になりました。意図して４寸のところだけ棟を高くしないで普通に作ったのです。そうすると高い棟じゃないものだけが滑らない。あとは形が違っても棟が高ければ雪が割れて落ちていくことがわかった。現地でやったものですからみんな納得して雪割り棟をつけることが承認されました。

落雪実験

山古志の設計グループは長岡市にお願いをして伝統的な在来工法に理解があって、大工に馬鹿にされていない建築家を４人選んでくださいって市に頼みました。
本来この地域であるべき姿っていうのを作らないで、ちょっと面白い形のものを作ってしまうとトラブルのもとになることがあるのでそういうのを強いる建築家は外してください。大工に馬鹿にされない建築家を選ぶようお願いしました。
いよいよこれから工事というときにびっくりするようなことが話題になりました。大工たちが私達は新築に手が出ませんと言うのです。半分あった修復の方を私達がやらざるを得ない。自分がやったもの親戚のものとか家の中に財産が置いてある中仕事しなくてはいけないので知らない人には頼めない。だから私達が改修をやりますということになり新築はどこか外に頼まなければならなくなりました。
結局、長岡の工務店の人たちにお願いすることにしました。とても厳しい工事費で建てなければいけないこと見積もりをすべてオープンにして相談しましたら理事の有志がお手伝いしますということになってうまくいきました。
ベターリビングにお願いして各部品２社ずつ集まってもらって数は必要ないからストックで余っているものを割安で提供してくれませんかというお願いをしました。お風呂とかシステムキッチンとかサッシとかそういうものを都合してもらいました。

復興モデル住宅の見学会

そしてモデルが２つできました。これはものすごく重要なことだったとおもいます。東日本でもこういうことができたところはいくつかありますが実際に建物が建つと話が早く進みます。一方は車を入れたい人、一方は車がない人とどちらかを選んでもらいました。
モデルを見に来た一人のお婆さんが昔風ですけど便利にできてますねってとても品が良いですねって言ってくれた。在来工法で作られた家全体を見ながら品が良いっていう言葉を使われたので私はすごくうれしくなりました。
結果的に長岡の工務店が仕事をするときには地元の工務店とお施主さんと３人が出て、地元工務店は改修で手は出せないけれど後のことは地元の工務店がお世話をしますそういうことを紹介しあって復興住宅に取り組むことになりました。
お金でいうと低床モデル 1,250 万円と高床モデル 1,350 万、いろんなお金があったので復興基金 180 万、義援金 459 万、県から 100 万、自己資金は 511 万円で小さな住宅ができる。２階は使わなくても夫婦２人だったら住めるという家です。
もともとこの地方には高床下というのがあって布基礎を高くして車を入れるという習慣がある。車を入れたら本当は用途が発生するので１階となり上は２階３階となるんですけど、車を入れないということで検査を通してあとで車を入れている。復興住宅ではそんなことはできないのと高い布基礎といっても構造的には２階を支えないといけない。高床下は用途がありませんから外階段で玄関まで１階上がります。そうすると雪の日に外階段から出入りしなければならなくなるのでそんなこと止めて堂々と１階から入りましょうということになって内階段で出入りができるようになりました。
公営住宅は復興住宅と同じように作ったんですけど、介護が必要な方が４所帯あって雁木のような外廊下みたいなものを設けていつでもここから介護ができる、様子を見れる特殊な公営住宅にしています。
金がいらないから皆さん公営住宅に住みたいって言い始めたんです。

完成した山古志の復興モデル住宅

公営住宅への展開（竹沢団地）

努力して 500 万で建てられるようになって減っていくんですけど、それを極力少なくするために市役所の人が自分で作れっていうことをものすごく熱心に説得して回りました。将来不良資産になってしまうという心配があって公営住宅の数を減らそうという努力を山古志、長岡市は熱心にしました。そういう努力がその後の東日本や熊本地震の復興で行われているといった話は聞いていませんが、そういうことも必要です。

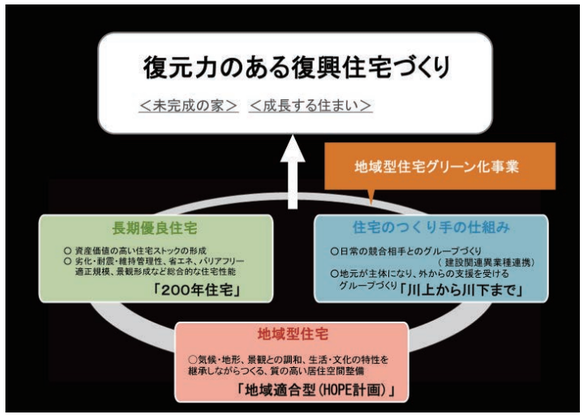
## 2. 東日本大震災（2011.3.11）に際して考えたこと

東日本が広範な地域ですごい量の損失をして山古志のスケールではない状態になりました。復興住宅を作るときには目的をはっきりさせなくてはいけない、それを効率よく達成することを考えなくてはいけないということを強く思いました。山古志とは違うと思ったんです。

システムとは
●目的をはっきりさせる
●目的を効率よく達成することを考える
そのために
●構成員を決める
●構成員の役割を明確にする
●構成員と構成員の関係を明確にする
誰が住宅を復興するのに寄与する人たちか決めなくてはいけない。これは山古志で自分たちは修理による復興しかできないって言われたことが引っかかっていてどういう人達が復興に役立ってくれるか、その構成員の人たちの関係を明確にしなければいけないと思いました。

目的をはっきりさせる
●早くつくる　（いつまで・工期）
●安くつくる　（〇〇万円、△△万円）
●しっかりしたものをつくる　（長期優良住宅）
●地元材でつくる　（県産材・国産材）
●将来増築できるようにつくる　（小さく、未完成）
●被災地の各地にふさわしいものをつくる　（其々の土地柄らしく）
●美しい集落・町並みをつくる　（調和）
この小さく未完成しかも調和して美しい集落・まちづくりというのは維持したいと思ったんです。

東日本の被災地は随分広範囲で海側の津波のところもあれば内陸の地震のところもある。目的の中の美しい集落をつくる、町並みをつくるということもはじめから頭に入れておかないと結果としてバラバラになるということがありました。
山古志でもなんでこんな大変なときに景観なんて言うんですかという質問は何回もありました。景観を考えないで手早くつくると後になって何十年も反省しなくてはいけない。みんなが住みたくなるような美しい集落とか、子供たちが懐かしさを強く覚えるような集落とかそういうものになるには初めから景観を考えてなくてはいけないということを強く言いました。
関係者というのは林業者、製材業者、工務店、商社とかですね、こういう人たちが復興に向かってある約束をするようなチームづくりが必要だということを東北ではいち早く主張しました。
ある町で年間に 100 戸の新築需要があったとします。概ね 60 戸が在来工法で地元の力でできています。概ね 40%くらいがハウスメーカーとかパワービルダーのものでできています。この状態が平常時日常的に起こっていました。
今度はこの町全体が被災したと仮定します。新築需要が仮に 1,000 戸あったとします。工務店の力では 60 戸しか作ることはできません。あとの 940 戸 94%は外の力で作らなくてはいけない。しかも外の力というのは基本的に在来工法ではないと考えるとこういうことになってしまいます。これではまずいでしょう。将来の仕事はここ（在来工法 60 戸）からしか発生しないと考えると地元の工務店はやっぱりなくなってしまいます。寝ずにがんばって 120 戸ぐらいはできるかもしれない。あとの 880 戸は外の力に頼らざるを得なくなる。なんとしても将来的に工務店がこの町に生存して生き残っていくためには 6 割は作りたい。これだけ作るのは大変だけどなんとかこれを維持することを考えてみましょう。
そうすると、地元の人たちは 120 戸まで必死につくります。あとの 480 戸は在来工法の外の力でつくらなくてはいけないということになるでしょう。これは山古志の人たちが長岡市の工務店にお願いしたケースです。何を言おうとしているかというと生業の生態系が守れるのではないかということです。それで安くて・早くて良質な住宅を大量に供給する必要があります。在来工法による合理的な生産システムをなんとか考えなくてはいけない。関連異業種の人たちと同業種の人たちと連携しなくてはいけない。普段は競合相手と思っている人たちともグループを作っていくような仕組みを新しく生み出さなくてはいけない。これを普段連携してない人が突然連携しようとするととても難しいことだということはよくわかります。実際にほとんどできていないんです。
それで未完成の家づくりをして、できるだけたくさんつくるような努力をして将来増築なんかになっていくといいんじゃないか、地域の生業の生態系の保全というものを考えることができるんですよって工務店の人たちに言うんですけど現実はなかなか難しかったですね。
こういうのをまとめて国が地域型住宅グリーン化事業というのを主張した時期がありました。東日本大震災のときに、グループづくりに熱を入れた時期があったんです。
そうなると復興住宅の新しいつくり方があって、それは社会の復元力をもたらすのではないかとおもったんですね。
今は平常時に非常時のことを想定してこういう関係をどうやって作っていくかってことをじっくり考えなくてはいけないということで事前防災とか防災のまちづくりとか、震災にあってないところでもこういう話が少しずつ少しずつ進んでいます。認識が少しずつ深まっています。




## 3. 豪雨被災の奈良県十津川村の復興住宅の提案

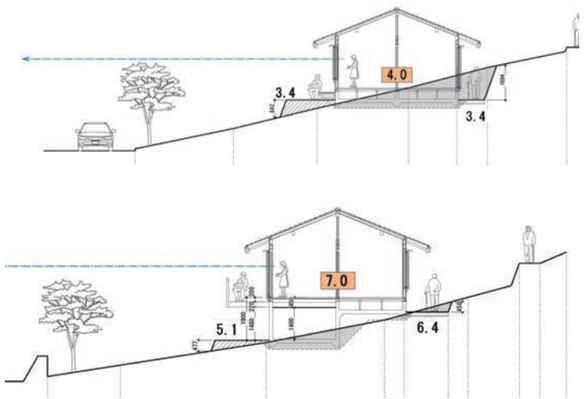
十津川村で東日本と同じ年の９月に大雨による洪水があって川津波のようなことが起こりました。復興支援の指名プロポーザルがあって山古志や東日本で考えたことをプロポーザルにしましたら選ばれてしまった。それで急遽十津川村に調査に行きました。
十津川村は全体が斜面地でできていて面積は東京 23 区より広いんです。そこに 55 の集落があって谷間にバラバラに住んでいます。ですから役場が面倒を見ようとするととても大変です。斜面地に住宅が作られていますから一軒一軒たずねるだけでも重労働です。調査をしてわかったんですけどここの家は奥に 2 部屋つながっている家ではなくて横につながっている横長の住宅です。斜面を切り込むと後ろの崖が高くなって土砂崩れするので、できるだけ山を削る部分を小さくして奥行きの浅い敷地に家を作ることが行われています。
奈良県の一番南の端で和歌山県と三重県に接しています。なぜか私達は県境の村に仕事で呼ばれることが多くて不思議だねって言ってます。
十津川村の典型的な建物は階段でアプローチします。後ろに削る量を少なくして前の方にせり出すタイプは吉野建てと地元の人は言っています。妻壁に板を貼ってあるのが特徴です。
ここでも９人の大工や工務店の人達とワークショップをしました。村の住宅の作り方の特徴を外部の目で見て、こういうところに特徴があると思うけどどう思うかどんな作り方にしたらいいかということを意見を聞きながら話を進めていきました。

これが典型的な部分で妻側の破風板の裏側にくっつけて板が貼ってある。平側にも軒の下に板が貼ってある。斜面で風も強いしものすごい雨が吹き付けてくる。下から降ってくるくらいの感じでこの外壁に当たると染み込んでしまうのでまず強い雨はこの外側の板で止めて下へ流して、平側も下へ流して入り込みにくくするという努力がされています。
妻に打ってある板をスバルノフキオロシ、平にあるのをウチオロシと名前があります。このスバルノフキオロシと呼んでいる部分が三重県の海側のお伊勢さんの周りの民家に見かけたことがあります。三重県出身の方はご存知かもしれません。海風が強いので軒庇が出ていて、先端に板を一度貼って外壁は下がったところにあるんです。ここも強い雨風が当たらないように工夫しています。
峠の尾根に建ってる家が地面に鉄の輪があって風が強いときは屋根が吹き飛ばないように縛る装置がついているというところもありました。熊野古道というのがこの十津川を通っていて、そこで見かけた屋根が飛ばないような工夫で、風が強い予報のときは屋根を越して地面のアンカーに結びつけるということをやっている。
十津川村でも２階建てと平屋と作って復興住宅に取り組みました。

実は東日本と同じ様に平らな土地を造成してそこにまとめて建物をつくるという案があってそれが 70 億から 90 億くらいかかると予想されていたんです。村はその補助金をもらってもあとで返せないのでどうしようということからプロポーザルをやったんです。僕らが小土木と言ったのですけど一戸一戸造成していけば安く済むんじゃないかって提案しました。概ね斜面の中に乗ってる場合と、斜面から張り出して吉野建てという場合の 2 種類の断面の家の作り方を提案しています。
新築が畑ですとか空き地を少しづつ融通してもらってそこに建てるということをやって、全体で 6 億円くらいで済んだのです。70 億から 90 億と言われてた復興住宅が 6 億くらいで済んだということになって村は大助かりってことになりました。

（左）十津川村の典型的な風景
（中）十津川村の典型的な建物
（右）風を受ける面を少なくするため
平屋建てが基本

十津川村復興モデル住宅 / 外観




2 種類の建物断面

## 4. 良寛の里の町並みづくり－長岡市旧和島村 2011 年～

長岡市で隣接する和島村が合併する、そこの島崎という集落に趣があるのでここをなんとかきれいにすることを集落の人たちと一緒にやってくれませんかと市長に頼まれて街なみ環境保全事業という事業でまちづくりをすることになりました。

そこは良寛さんが最後の５年間住んでた村です。生まれる土地は選べないけど死ぬ土地は自分で選ぶということで良寛さんがここを選んでここで亡くなったというのが村の人達の誇りです。

何度も村の集落の人たちと話し合いをしながら調和した街をつくるとこんなになるよと話を繰り返していたらだんだん意見が揃うようになってきました。ワークショップのやり方として集落の方々とワークショップをする。一方、別の時間帯に製材所や大工さんや板金屋さんたち家造りの職人達とのワークショップもやったんです。

先進地を含めてこんな街なみになるといいねと意見が合ってきた後に職人達に集まってもらってこういう話にまとまってきてるからそれを実現することを考えて欲しいっていう風にお願いしました。

『はちすば通り』というんです。なんとなく屋根が揃って雰囲気があるところです。

外壁は現代的にサイディングでできていますがそれを板張りに替えるとこんなになりますよっていう画を書いてどうですかという話をします。すぐには合意に至らないんですけどだんだん合意に達していきました。その時にはサイディングが傷んだあと同じサイディングが手に入らないっていうことはこの人達はわかっていたので、だからそうだよねっていうことになった。

良寛さんの庵（いおり）があったところで、ここに庵があって縁側があったとイメージしてこんなふうなものを作ったらいいじゃないかとか、後ろの家が板張りに変わると雰囲気が出ていいですよねってことを言いますとみんな自分の家じゃないところではいいと言う。

良寛さんのお墓の廻りで後ろの家も白っぽくてあまりお墓に合っていないからこうしたらどうですか、そう簡単には変わらないけれど良寛さんのお墓の廻りをみんなで掃除しようとかそういう意見が自然と出てくるんです。

まちづくりというのは目的に直線的に進むのではなくて紆余曲折しながらいいところに落ち着いていくっていうことがあって、合意が形成されるまで辛抱強く進めなければいけないってことがわかりました。

結果的には 100 人が合意して捺印して計画段階で地元の製材所、大工、板金屋さん達ともワークショップしましたのであとは放っておいてもこんな風になっていく。連携とか協働っていう話をしましたけどみんなで目標を一緒にして同じような作り方だけどちょっとずつ違うような作り方をしていこうということになっていくことがわかります。

現在のはちすば通り

板張りのはちすば通り

良寛さんのお墓（現在）

良寛さんのお墓（イメージ）

協定を結んだ段階で一軒の親父さんがそれも積極的にいい意見を言ってた人が、ある大手ハウスメーカーと契約しそうだ、遂に契約しちゃったというようなところまで行ってしまったんです。なんとか板張りになりませんかという話をしたら息子に嫁が来て一緒に住んでくれる。その嫁は元のハウスメーカーのままがいいというが私は説得できなくて困っているということだった。

ハウスメーカーには板張りにするというところまで頑張ってもらったんだけど元に戻しましょうと。家の前に駐車場を作りそこを街並みの雰囲気にしますから後ろでちょっと見えない住宅は勘弁っていう話になってみんな結局勘弁することになりました。

家庭内の問題が解けていたら住宅の方も板張りになっていたんです。そういった経験は島根県の石見地方でもありました。ハウスメーカーと在来の人たちが一緒にまちづくりをしているところで、島根県の日本海側は赤い屋根がずっと続いているのです。赤い屋根を守るというのを一つの目標として、赤い屋根の景観を守ることにしました。この勉強会にハウスメーカーの人も入っていたので工事のときには赤い屋根にしてくださった。

地域のルールにハウスメーカーが対応してくれるという成功体験があったので、ここでも成功すると思いました。表側はきれいにできたので、だんだんよくなっていくと感じています。

## 5. 福島・南会津町　旧舘岩村 －山村の魅力ある風景づくり 2005 年～

舘岩村というのは福島県の群馬県と栃木県との境界に近いところにある山の中です。１月の末から２月にはマイナス 15℃から 19℃くらいになり４月まで雪が残ります。５月の休みのときに一気に花が咲くんですがこれが素晴らしい桃源郷という感じで東京だと花が咲いていく順序がありますけどここは一気に咲くんです。だからびっくりなんです。スモモ、サクラ、レンギョウ、コブシなど多くの花々が一斉に咲きます。

そんな寒いところで家を建てる HOPE 計画が始まりました。設計はこちらでやり骨組みは地元の人達、組み方に関しては大工さんに自由にやってもらいました。外断熱を含めて断熱の方法、気密の出し方とか設計側で指導しながら工務店に教えていきました。

４棟建ったんですけど４棟で村の工務店の大工が全部参加したことになり協働で２戸ずつ参加して全員が新しい家作りを覚えることができました。

中学生が勉強に来てどうして暖かいかという説明をしてあげました。色々と感心してくれて村の大工さん達は全員作れるようになったんだよという話をしたらそうかもう安心だと言ってくれました。やっぱり外の世界を知らないと新しいことに取り組むという意欲が沸かないです。そんなことで富山県や岐阜県を案内して回りました。

家造りは終わったんですけど先程の一斉に花が咲くっていうことがとても感動的だったものですから『花のお宿の里づくり』という運動をしませんかっていうことを提案して学生たちと一緒に苗木を植えることをやりました。そしたら翌年に苗木を買ったからまた学生さんたちと一緒に植えてくださいっていう依頼があって、その運動が数年周辺の村にまで広がりました。

それから塗装ワークショップというのをやりました。学生と一緒に透明な吸い込む塗料を塗るだけなんですけれどもそれがきれいになるのを見て翌年塗料も全部村が準備しますので学生とまた塗りに来てくださいと言われて村の人たちと一緒にやりました。

地域の人たちと一緒に塗装をするということで花のお宿の里づくりでお客様を気持ちよく迎えられるようなことに手をかけるという意味が住民の中でわかってきたんです。空き家のお掃除ワークショップというのもやったんです。はじめは靴のまま上がらないと怪我をするようなところをきれいにしていって最後は畳を磨いて囲炉裏に火を起こして炭を焚いてすっかりきれいになった。今はこの家は役場がトイレと障子と畳を入れ替えてお客様をもてなす空間に変わりました。

この茅葺きの集落です。今ここは伝建に指定されています。指定を受けてこれをどうやって守るかが課題なんですけど 19 件では茅葺きの職人の仕事が回らないので、周りの集落に残ってる茅葺きの建物と合わせて町が補助金を出しながら修理をしたり葺き替えをやったりすれば職人たちも仕事があって地元でやっていける。町長と話をして福島県で２つしかない伝建の町の一つですからそれを大切にしていきましょうという合意はできました。条例はできてませんけど大工と茅葺き職人が生きていける村にしようとしています。

## 6. まちづくりの原点－佐賀・有田の建築・まちづくり　1977 年～

私がこういうまちづくりを始める原点が有田にあるんです。有田は焼き物の町で美しい焼き物が色々作られているんです。代表的なのが古伊万里様式と柿右衛門様式、鍋島様式という３つの様式です。

古伊万里は中国の明の時代の焼物の図案をオランダ東インド会社が注文をしてくれて有田でこういうものができるようになって江戸の初期から 250 万点くらいのものがヨーロッパに輸出されるようになります。この技術を覚えてしばらく経ってから柿右衛門様式が生まれ日本的なものに変わります。さらに鍋島様式が出てきます。技術を導入しながらだんだん日本化してきたということがわかるのですけれども前のものも残してるんです。それが今でも有田の３様式と言われ鍋島様式の新しいものはモダンな図柄になって現代の工芸展でも当然称賛されるようなものなんですけど、こういうものを今でもやっている人が文部科学大臣から人間国宝に指定されるんです。伝統を守るけどそれまでになかったものを少しづつ作っていく。なかったようなものも含めて鍋島様式だねって言われるもの、あるいは柿右衛門様式を破るんだけど破ったものもやっぱり柿右衛門様式だねって後になって言われる。そういう破り方をすると優れた伝統の守り手ということになるんです。

それでまちなみですけど 1828 年に大火があって全部焼けてしまった。1831 年天保元年これが最初にできて同じような防火づくりのまちなみに変わっていくんです。これは今も残っています。

私達が関わっている頃はまだ指定されていなかったんですがこれも後で伝建に指定されます。こういうまちなみを大切にしていきたいと思いました。

町の中にまちなみを壊すような現代建築が出てきて、コンクリートで作ったら四角い建築は常識的ですが周りと合わない。色タイルを貼ったら全然合わないものができてしまうんですけど当時そういうことが平気で行われていたんです。それでそういうことをやらないで伝建の町になるようにその美しいまちなみを維持していきましょう

今も残る天保元年の建物

山口邸外観（改修前）

山口邸外観（改修後）

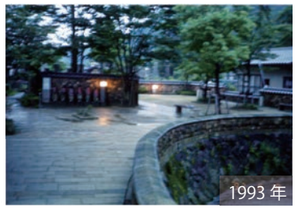
山口邸前庭（改修後）

という運動を始めたんです。
山口邸は昭和 57 年に竣工しました。正面を低くして後ろの山が見えるようにしながら住宅の居住部分を後ろに下げてちょっとした前庭を作りました。道路からセットバックして車が一台停まれるようなスペースを設けちょっとお客さんが寄るときでも宅地の中に停まれるようにしたんです。
前庭には夏みかんと椿 2 本しか植えていません。敷地に入ってくる時に後ろの山も感じられるものですから緑はたくさんあるという印象を受けます。
日常生活をする部屋の中はモダンな現代的な作り方にしています。長野県の小布施で宮本先生という建築家が言っていたのは外はみんなのもの、中は自分のものということで設計するといいというようなことを主張していてちょうど同じ頃に小布施の町がきれいになっていきつつあったんです。中は現代的で住みやすいものにしましょう、外はまちなみになんとなく合ったものにしましょうということでつくってきました。
まちづくり活動ということで住宅だけではなくてこういう路地を生かしていく方法ですけどこれ不思議な材料でできています。江戸時代の登り窯の廃材です。登り窯の廃材で塀ができている町って多分日本にもないんです。世界にもないとすると世界に一つの材料で作られた塀じゃないか大切にしましょうという話をしました。

トンパイ塀の路地

それから広場の整備を頼まれました。裏通りのちょっと膨らんだところの六地蔵広場という広場をきれいにしたんです。そうするとここに車を止めたりするのをみんなで止めようとか、いつも誰かが掃除をしてホウキの目があるとか地蔵さんに花が飾ってあるとてもいい空間に変わりました。
数年後にこの廃屋を町で買うから広場を広げてくれって注文があったんです。塀の作りかたも隣の窓に合わせながら少し低くするとかそういうことをやっていくとこちらの家の人からもすごく歓迎される。それから手前の川の護岸というか登り窯の廃材を活用しながら裏道の広場を整備していく。随分昔の話ですがこういう仕事をすると町の人から信頼されるんですね。

美術館を作って住宅を作った時も、あれは県の仕事でしょとかお金持ちの人の仕事でしょとあんまり建築家は信用されませんけど、こういうことをやると自分たちの地域の中をきれいにしてくれる建築家だということで親しみと敬意を持ってもらえるんです。仕事の仕方って普段の仕事の枠を少し越えたことをしないとつながらないなという気がします。なかなかいい雰囲気になりました。
昭和 59 年に HOPE 計画を有田の町でやることになりました。HOPE 計画は地域適合型住宅というのをそれぞれの地域で検討していいという話で補助金が建設省から出る。それまでは公営住宅は中央でモデルが作られてそれが全国に配られてそのとおりに出来てたんです。まずは公営住宅をそれぞれの地域に合うように設計してもいいよって話があり、次に住宅もそれぞれの地域で考えてもいいということになってそれに取り組んだのです。



六地蔵広場の変化

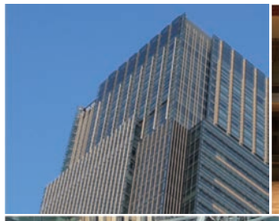
公営住宅と住宅を地域に合うように考えましょうっていうことで焼物に負けない美しい住まいと街なみづくりをしようということになり、確認申請を出しているすべての人達に勉強会に参加しませんかって町の名前で手紙を出しました。工務店が 7 社で設計事務所が 6 社。入ってない人もいますけどほとんど参加したんです。勉強会が始まり有田の町でどういうものを作ったらいいかって話をしていきました。最初に私は先の山口邸ともう一軒の図面を皆さんに全部見せて現地を案内して問題点を指摘してもらったり住宅の作り方の中で今後やらないほうがいいこと、やったほうがいいこと、やってもいいことを仕分けしましょうという話をしたんです。
そして順繰りに建てた住宅をそれぞれが発表して建物を案内して現地では悪口は言わないで帰ってから問題を指摘するというというような約束事で全部回って、それから町の中の既存のものについてもそんな話をするということをやりながら有田らしいものと有田らしくないものと仕分けていきました。
この家が一番問題になって明治 38 年に出来てるんですけれども有田

モダンな建物

の町の中に馴染んでいるんです。これは撤去したほうがいいのか残したほうがいいのかというところからみんなで話をしました。
例えば窓なんてデザインがいいとか、門があったり瓦が乗っかったりして、外国人が一人で住んでいるみたいだけど一所懸命溶け込む努力をしてるっていうのを評価しようじゃないかとか色んな意見が出てくるんです。
これからこれに近い現代的な建築を作りますかねというとそれはなかなか難しいねって話になった。調和するような現代建築をつくるにはまずはできるだけ似たようにしたほうがいい。材料も形もちょっと違うけどこれもあったほうがいいなってものを作り出すことはすごく難しいのでそれは少し慣れてからにしようって話にしました。
それまでに窓とか玄関とか部分的に色んなことをチャレンジしながら大部分は既存と調和するようなものにしながら、少しづつ変えていくようなことも勉強のうちだよねっていうことを話ながらみんなで作ったレポートが出来ました。138 項目あってこれが今でも守られています。HOPE 計画の報告書として建設省に提出しています。
HOPE 計画を初めてから年を追うごとに集まった人たちの有田らしい建物が建っていくんです。
そうしたらモデルルームが街中にあるって感じになるんです。前に作った人の家をみんな見に行ったりあんな風にしたいこういう風にしたいっていうのをみんな言えるしそういうことで協働、連携ということがうまくいきました。
とにかく一つの町くらいだったらやろうとおもえばできるってことの一つの証だと思います。

### 7. 新しい潮流「クールジャパン」 建築設計におけるジャパニーズ・テイスト

ちょっと変わった話をします。地域に根付くっていうのを日本中で考えるとそれは日本的ということなんじゃないかと思ってジャパニーズ・テイストって言葉と、クールジャパンと言う経済産業省が使って要る言葉があるのでそれで少し話をします。
これは東京ミッドタウンの超高層の上の部分です。こういう格子状の超高層っていうのはおそらく世界にないと思うんです。
僕らは都心の再開発ですからモダンなもので当然同じようなものが世界にあると勝手に考えてるとおもうんですけど外国人が来るとこれは日本にしかないと思うんじゃないか。これは皆さんも体験されてるとおもいますがアプローチですがすごく気持ちいいんです。
なぜ気持ちがいいのかって注意してみたんですけど、コクマザサとかサクラとか日本の庭とかお寺さんとかに使われている日本の自然に生えている木が採用されているんです。全体にすごく日本的です。
それから受付の背面が格子状になっていてここに笙をベースにしたようなアートが付けられていて、これも我々が見ると自然にいいデザインだなと思います。
日本的と思わないかもしれませんがあらためて見ればすごく日本的



東京ミッドタウン

で外国人が見たら確実に日本的デザインです。
照明は行灯です。それから店舗入口も格子状にできています。
この格子でイメージする建物はありませんかねって質問をするんですけど、これは桂離宮の池の向こうにある松琴亭の床の間から襖にかけてこういう大胆な白とブルーの市松の紙が貼ってあるんです。それを知ってる人が考えたんだと思います。
それに対してすぐ近くにある六本木ヒルズは日本的要素が見つからなくて全体に外国風でモダンです。いいのか悪いのかよくわからないんですけれども僕はイライラするんですね。こんな違いがあります。
日本橋室町で今展開されているコレドのデザインは中央通りから中の方に入って表通りに提灯があって中に神社があるんです。
三重県の津で建具の展覧会があり、その時、三重県の鈴木知事に会う機会がありました。その時、こういう職人さんの建具を公共建築の中に使ってくださるといいですよねって話をしたんです。そうしたら鈴木知事が「私やりましたよ。日本橋室町で三重県のアンテナショップでやりましたよ」って言うんです。すぐコレド室町へ見に行ったら、確かに麻の葉模様の江戸小紋をベースにした組子が照明になっていました。その周りを歩いてみたら通りの照明、提灯、暖簾といたるところに日本のデザインがあふれているんです。

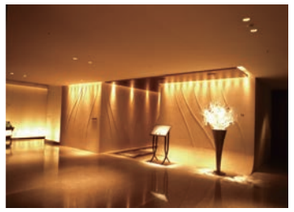
三重テラス内部の組子天井照明

コレド室町中通り

コレド室町 2 のファサード

マンダリンオリエンタル東京 / 外観

パレスホテル　左官 久住有生


左官 挟土秀平

それからこの 3 階の壁に瓦が造形的にデザインされてアクセントになってるんですね。
表通り三井本館の向かって右隣の外資系のホテルですけど大きな行灯と暖簾が下がってジャパニーズ・テイストが至るところにあるっていう感じです。そういうことで今の室町が作られつつあるんです。三井不動産の専務にお会いする機会があって東京ミッドタウンでジャパニーズ・テイストで成功して室町でそれを更に展開してるってことを私はスライドを使って講演をしてるんですけど当たってますかねって聞いたらおっしゃる通りですと。とにかく積極的に日本趣味を出そうというのが三井不動産の考えなんだということです。
パレスホテル 2 階の食堂の周りには左官の久住章さんの息子の有生さん、レストランのエントランスには挟土（はさど）秀平さんが仕事をされています。真田幸村の NHK のドラマの最初に左官のコテで字を書く場面が出てくるんですけどその職人です。アメリカでも盛んに仕事をしているそういう人の左官の仕事が最も新しいモダンな日本のホテルのおもてなしの空間に使われている。
随分前に私が設計した晴海の建物の中に書院の二間続きの大部屋を

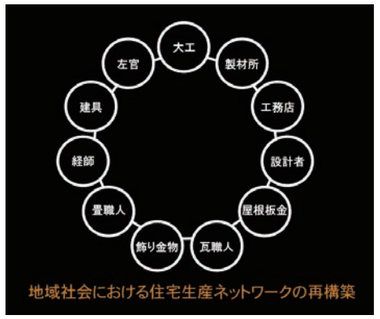
作ってマンションの子どもたちが琴の練習をやっている。これはお茶室でちゃんとしたお茶の練習ができることを若い高校時代に日本の文化を体験できるようなスペースを準備しました。

## 8. 6 省庁による「和の住まいのすすめ」の発行

平成 25 年 10 月に、6 省庁が一緒になって「和の住まいのすすめ」という本を作りました。
これは夏の日差しが中に入らない程度に庇が出て、冬の日差しが中に入ってくるんですけど強すぎたら障子で止めてる。障子のない同じような建物では日差しがこのように入ってくる。
水俣にできたエコハウスですけど夜ここで布団敷いて寝ると下の窓は網戸と格子が付いていて、ガラス戸を開けて障子を開けると夜はここから布団で寝てる高さに風が入りとても涼しい感じで過ごせるというエコハウスを考えた熊本の設計者の古川保さんが設計した住宅です。こういうところで赤ん坊を寝かせていると転んでも安心です。
土間で食事が出来るようになっている家ですけれどもここに建具が入ります。建具が入ると屋内になるんですけど建具全部外して暮らしていい季節が日本には必ずあります。それを楽しみましょうという生活の提案です。こういうのは日本的ではないかと思います。
富山県の砺波のアズマダチという民家ですけどきれいな妻側を見せています。西側にカイニョという杉の防雪防風林がありこの妻壁に相当する西側の反対側は大壁になっています。大壁ということは普段この杉林で見えないんですけど防風林をつくってもこの真壁のような作り方をすると守れない。西側の冬は風がとても強いので大壁にしないといけない。だから気候風土に合っているというのは同じ場所でも方位によって違う、方位によって変えなくてはいけないという例です。
そんなことを学びながら先程新潟でも随分上まで板張りが上がってましたけど日本海側は秋田までいきますと冬の西風がすごく強くて雪が横に流れてるんです。ですから壁を守る板壁っていうのは上までないと役にたたないということで板壁の高さが変わります。
花が一挙に咲く舘岩村の現在は南会津村の前沢という集落ですけれども、この外壁の高さというのは積雪の高さとどうやら関係がありそうだなとおもえます。風がそれほど強くないところの積もった雪に対する壁の守り方です。

## 9. 生業の生態系の保全

文化庁がユネスコに対して職人達の仕事は文化財だということで登録しようとしているんです。14 の種類の国の技術と技術を持っている団体が指定されようとしているんですけど、これに庭や石垣が入ってないじゃないかっていう話とか、団体といっても色々あるのだからこの団体だけにしないで欲しいとか、先程の挟土さんや久住さんなんかはこの団体に入っていませんので優れた職人たちの技術は文化財だとおもうんですけどどうして入れないんですかとかを文化庁に話にいって、そのためにシンポジウムを開いたりしたんです。
職人達にモノを言わせようということで職人宣言をしてもらって、色んな職人が連携していい仕事をするような日本文化の表現されたような建築にしましょうと運動をしています。
こういうことは生業の生態系の保全につながって行くんですけど例えばモノを作る時に一部に職人達の仕事が出来るようなところを作ればいい。何も伝統的な建築を作る必要はないんです。三重県の鈴木知事さんにこういうところで使われたらいいですねって言ったのは、例えば庁舎を作る時とかに少しずつこういう技術が入っていくような図面を描くように設計者に発注のときに注文を付けてください、地元の職人が仕事が出来るような部分を一部でも設計するように指示をしてください。そうすれば必ず地元の職人達が公の建築の中で仕事ができて、仕事があるから弟子も育てたくなるし一生やっていけるようになる。これは新しい技術と伝統技術の融合じゃないんですか、そういうことをすれば日本の色んな建築技術が伝わっていくんだと思います。
それぞれがどんな技術を持っているのか知っていますか。学校では教えていませんよね。社会の中でどんな役割を果たしているか知ってますか。
今住宅以外の建物にまで木造が広がって都市木造と言ってます。林業から色んな関係の人が役割を果たすってわかってますかね。



屋久島新庁舎パース

屋久島で今年の 5 月に竣工したんですけどこんな町役場を設計しました。
台風がしょっちゅうくるので風当たりの少ない構えとか、内部は町民が来て色んな催し物ができる空間で、屋久島で植林した木材で作っています。家具には屋久島の広葉樹も使っています。そんなことで地元の材で地元の職人が建てています。これは全部島の工務店が 5 工区に分かれて仕事をしてくれました。設計監理がものすごく大変で全部面倒見なきゃいけない。工事監理は設計者と町役場の担当者と連携して協働で行いました。
こんなことで生業の生態系を守っていきたい、現代建築から独立するのではなく融合して行くようにしたいなと思っています。（終）


三井所 清典（みいしょ きよのり）

1939 年　佐賀県生まれ
1963 年　東京大学工学部建築学科卒業。同年、RAS 建築研究所同人入所。
1968 年　東京大学大学院博士課程修了。芝浦工業大学工学部建築学科講師。
1970 年　アルセッド建築研究所設立。現在に至る。
1982 年　芝浦工業大学工学部建築学科教授。
2006 年　芝浦工業大学退職。芝浦工業大学名誉教授。
2007 年　（一社）東京建築士会会長　2013 年退任
2012 年　（公社）日本建築士会連合会会長　現在に至る。
□主な作品と受賞歴
佐賀県立九州陶磁文化館（1981 年建築業協会賞　1983 年日本建築学会賞）、北九州市営団地ビレッジ香月（1990 年福岡県建築住宅文化大賞・いえなみ部門）、明治神宮神楽殿（1995 年建築業協会賞）、宮崎県木材利用技術センター（2002 年県木造建築設計コンクール最優秀賞　2006 年木の建築賞）、山古志における自立再建住宅の支援（2007 年木の建築賞　選考委員会特別賞）、長岡市山古志地域における「中山間型復興住宅」（2008 年地域住宅計画賞）、十津川村復興公営モデル住宅（2013 年地域住宅計画賞）、会津坂下町気多宮街なみ交流センター（福島県建築文化賞・特別部門賞）、柏崎市えんま通り商店街におけるまちづくり市民事業による住宅再生と市街地復興プロジェクト（都市住宅学会・業績賞）、道の駅あいづ（木の建築賞・木とふれあい建築賞）　他多数。

A. 庇による夏の日射遮蔽 B. 冬の暖かい日差しが生じにあたっている C. 地窓障子戸を開け、通風を良くする D. 庭に面する土間の食卓（建具を閉めると内部になる）E. 砺波平野の民家（あずま建ちと北西の季節風に対する防風林）F. 板張りの大壁（冬の季節風と豪雨・豪雪対策）